


在外研究員研究報告書

2018年1月10日 受付

所 属	文学部		氏 名	下楠、昌哉 
職 名	教授			
研究課題名	西洋文化の日本での受容・変容・再発信の過程－文学における幻想性・怪奇性を中心に			
研究期間	2016年 9月 1日 ～ 2017年 8月 31日			
滞在期間 ・滞在地 研究調査先	滞在期間	滞 在 地	研究・調査先	
	2016年9月1日～11月15日	ダブリン、アイルランド	アイルランド国立ユニヴァーシティ・カレッジ・ダブリン	
	2016年11月16日～2017年1月4日	日本	同志社大学	
	2017年1月5日～8月31日	ホノルル、アメリカ	ハワイ大学マノア校	
研 究 費	288万6千円		研究成果の概要	別記 4,000字程度
発 表	題 目 名	発表学術誌名Vol. No.	発行年月日	
	「ハワイ大学マノア校における日本文学に関する学生の学びの諸状況」	『同志社英語英文学研究』No. 99	2018年3月刊行予定	
	演 題	講演学会名	講演年月日	
	Rudy and the Repressed Image of Unbaptised Child in James Joyce's <i>Ulysses</i>	The Japan Branch of the International Association for the Study of Irish Literatures (国際アイルランド文学協会日本支部)	2017年10月14日	
	演 題	講演学会名	講演年月日	
Writing the Fantastic in Twilight Zone: Influences of Japanese Ghost Stories and Western Supernatural Fiction in Izumi Kyoka's Fantastic Literature	The International Conference for the Fantastic in the Arts (芸術における幻想性のための国際学会大会)	2018年3月14-18日のいずれかを予定		

在外研究員研究報告書 別記

文学部 教授 下楠昌哉

研究題目：西洋文化の日本での受容・変容・再発信の過程—文学における幻想性・怪奇性を中心に

今回の在外研究は、科学研究助成基金助成金 基盤研究(C)課題番号25511017「西欧文化の日本での受容・変容・再発信の過程—文学における幻想性・怪奇性を中心に」(事業期間:平成25年度~29年度)の一部として位置づけられている。この科学研究費による研究は、明治期以後に日本に移入された西洋の文化がどのように日本の文化に取り入れられ、さらに世界に向けて再発信されているかについての文化的なサイクルを研究の対象とし、主に文学における幻想的あるいは超自然的なモチーフを中心に研究を行っている。

2016年9月1日より同年11月15日までは、アイルランド国立ユニヴァーシティ・カレッジ・ダブリンにおいて、Anne Fogarty教授の指導の下、英文学・演劇・映画学科のVisiting Professorとして研究活動を行った。アイルランド文学は、妖精をはじめとする超自然的なモチーフを取り込んでいることがよく知られており、日本では明治・大正期から数多くの同国の文学作品が受容されていたことが確認されている。現地での研究を進めた結果、ジェイムズ・ジョイスの大作小説『ユリシーズ』(1922)において、幽霊あるいは妖精として登場する主人公レオポルド・ブルームの息子ルディに、アイルランドのキリスト教信仰の歴史と民間伝承に深く根差す「洗礼を受けずに死んだ子ども」のイメージが色濃く描き込まれていることを見出し、それについてのペーパーを執筆、同国詩人Gerard Fanning氏(2017年10月逝去)に原稿の校閲を受けたうえ、Anne Fogarty教授とそのペーパーの内容について議論をし、さらに研究を深めた。「洗礼を受けずに死んだ子ども」に超自然的な力があることをイメージさせるカトリックの教義もしくは民間伝承については日本ではほとんど知られておらず、モダニズムの大作とされる『ユリシーズ』に潜む幻想性の新たな側面を論じるとともに、ジョイス研究そのものに対しても、新たなテキスト解釈を提示する成果となった。この研究成果は、2017年10月14日に近畿大学で開催された国際アイルランド協会(The International Association for the Study of Irish Literatures)日本支部の大会において口頭発表し、聴衆から好意的な反応を得た。発表の内容は論文の形式にし、学会誌に投稿予定である。

アイルランドでの研究成果をまとめ、次の滞在地における研究体制を整えるための国内研究期間を経て、2017年1月5日より同年8月31日までハワイ大学マノア校において、同校日本研究センター(The Center for Japanese Studies)のVisiting Colleagueとして、東アジア言語・文学学科のKen K. Ito教授の指導の下、研究活動を行った。研究の主要な目的は、日本文学における幻想性が英語圏においてどのように研究されてきたか、であった。研究以外の事務的な諸般の事柄に関しては、日本研究センターのGay Michiko Satsuma副研究所長に大変お世話になった。また、同センターLonnie E. Carlile所長、Robert N. Huey東アジア言語・文学学科長には、授業見学の許可など各方面でお心を砕いていただいた。

ハワイ大学マノア校を研究拠点にするにあたって、計画の初期段階では日本文学・文化などがどのように受容されているかについての社会的な調査も構想していたが、ハワイ大学の指導教員を選定するにあたって研究対象のターゲットを絞る必要があり、英語圏における日本文学の幻想性についての研究をコアに据えることとし、英語圏における日本文学研究として名高いKen K. Ito教授に指導教員をお願いした。この時点で、米国政府機関に指導教員と共に研究計画を申請して許可を得る必要があるヒトを対象としたアンケート調査などは断念せざるをえなくなった。しかしながら、アメリカの大学に長期滞在してその教育状況を検分できる得難い機会であることを鑑み、ハワイ大学における日本文学教育についての諸状況を調査し、研究ノートの形にまとめることにした。それが2018年3月に『同志社英語英文学研究』99号に掲載予定の「ハワイ大学マノア校における日本文学に関する学生の学びの諸状況」である。調査の過程で、ハワイ大学における日本研究の礎を築き上げたのが、同志社第七代総長原田助であったことを知りえたのは感慨深かった。The Hawaiian Journal of Historyに掲載された、原田の功績をまとめた英語論文は、ハワイ大学の日本研究センターのウェブサイト経由でいつでもダウンロード可能な状態になっている。

ハワイ大学は日本研究に関して、アメリカ国内で最大規模のプログラムを誇っている。2016年1月現在、各学部学科にまたがった日本関連の研究のフルタイム教員が35名、日本語のフルタイム教員が14名おり、毎年100を超える講義が開講され、3500名を超える受講者がいる。アメリカにおける日本研究は一つの学問分野というより日本に関わる様々な分野の研究の集合体という学際的側面を持つが、ハワイ大学の日本研究の体制は、まさしくその特徴を体現している。その一方で、総合大学であるハ

イ大学の東アジア言語・文学学科は日本語・日本文学に関わる講義を多数開講し、Japaneseを専攻・副専攻とできるコースを学生たちに提供している。そのような学生たちは、日本語のプレースメントテストの結果に従って日本語と専門科目の取得必要単位数が決まり、言語学系あるいは文学系の科目を集中的に履修することになる。この研究ノートにおいては文学系の授業を集中して選ぶ学生の履修状況を調査し、いくつかの授業においては授業見学を行った。学生たちはまずナンバリングシステムで200もしくは300番台の授業において、翻訳で日本文学の作品を読む。200番台は概論系、300番台は個別のトピックを軸に据えた講義である。どれも15~25人程度のキャップがあったディスカッションなどを行う授業で、いわゆる大講義の授業ではない。日本文学の原典のテキストには400番台のクラス、すなわち4年次より取り組むことになり、より学びを深めたい学生は大学院に進学することが期待されている。授業において教員たちは、日本の外にいる現代の学生たちに授業の内容がリンクしてゆくように腐心していた。その一方で、授業においてポップカルチャーを表層的に取りあげたりはせず、古典文学を扱う授業、近代以後の文学を扱う授業、どちらにおいても文学史のコアとなるような作家の作品が授業の中心に据えられていた。カリキュラム外では日本研究センターが、学期中は月に二度のペースで各種イベントを主催し、学内において日本に関する学生の興味を喚起するよう尽力していた。この研究ノートを執筆するにあたっては、2006年6月10日に同志社大学で開催された、同志社大学国際センターとAKP共催のシンポジウム『リベラルアーツカレッジで日本学を学ぶ／教える』を書籍化した同志社大学国際センター編『アメリカの日本学教育ーリベラルアーツカレッジにおける日本イメージの再生』（大巧社、2007年）から、アメリカで日本について学ぶ大学生の一般的な傾向や、小規模学部教育機関であるリベラルアーツカレッジと総合大学であるハワイ大学との差異などについて、多くの知見を得た。

日本文学における幻想性が英語圏の研究においてどう扱われたかに関しては、まず英語圏の文学における幻想性そのものの研究史を実地に検証することから始めた。ハワイ大学マノア校のハミルトン図書館には、文学部だけでなく芸術学部を持つ総合大学らしく、幻想性を扱った研究書が多数所蔵されていた。その結果、ツヴェタン・トドロフの幻想文学研究の英訳の出版をきっかけとして、1980年代前後にFantasyとは何かに関して英文学会全体を巻き込んで多彩な議論が交わされていたことがわかった。アメリカで2018年に第39回目の大会が開催される、芸術における幻想性のための学会（The International Conference for the Fantastic in the Arts）が創設されたのもこの時期である。続いて、英語圏における日本文学・文化研究の重要な著作を追っていったところ、1990年代後半、2000年代、2010年代、どの時代においても日本文学・文化における幻想性（fantasy, the fantastic, or *fushigi*）を定義するにあたって、二つの研究書が言及されていることに気づいた。その二つの研究は、前述のトドロフの著作とRosemary Jackson, *Fantasy: Literature of Subversion* (1981)である。後者の著作は日本では等閑視されてきた重要著作であるため、現在日本語による翻訳を計画中である。出版された際には、今回の在外研究の成果の一部であることを明記して、世に問いたい。

1990年代は、アメリカの日本文学研究において、日本文学における幻想性が注目された時代であった。Ken K. Ito教授によると、それは複合的な要因によるものだったそうである。泉鏡花と円地文子の

英訳の出版、『源氏物語』の六条御息所の生霊を扱ったDoris G. Bargenの影響力ある論文の刊行、後に日本でアニメ研究で有名となるSusan Napierの日本近代文学における幻想性を扱ったモノグラフの出版など。2001年に宮崎駿監督の『千と千尋の神隠し』が公開されてアメリカでも大ヒットしたインパクトも大きく、1990年代以後もアメリカの日本文学・文化研究においては、幻想性は一つの注目トピックとなり続けている。こうした研究の変遷を調査してゆくうちに気になったのが、泉鏡花が日本的な幻想性を代表する作家として、頻繁に強調されている点であった。鏡花が同時代の自然主義作家たちを公然と批判し、明治以前の文学の影響が色濃い作品を書いたのは確かであるが、鏡花は決して西洋からの文学を否定していたわけではなかったからである。ハワイ大学ハミルトン図書館には日本文学研究のための基本的な日本語文献がそろっていたため、英語圏における泉鏡花の評価に一石を投じうるような研究を試みることにした。その研究成果が、2018年3月にアメリカ、フロリダでの、芸術における幻想性のための国際学会大会で行う予定の研究発表“Writing the Fantastic in Twilight Zone: Influences of Japanese Ghost Stories and Western Supernatural Fiction in Izumi Kyoka’s Fantastic Literature”である。怪談に強い興味を持っていた鏡花は、超自然的な出来事が実際に起こっていたのか、いなかったのか、わからないような状況でこそ、怪談の聞き手や読み手の心に不安や恐怖がかきたてられることを理解していた。同時に鏡花は同時代に翻訳によって流入してきていた西洋の超自然を扱った作品群に精通しており、それらの作品について論評などを残している。生前不遇であった鏡花だが、日本では1970年代や80年代に幻想文学が脚光を浴びると時を同じくして再評価の機運が高まった。三島由紀夫による称賛なども鏡花再評価の契機であったが、そうした鏡花の再評価が行われた理由の一つは、ツヴェタン・トドロフが幻想文学の勘所として挙げた、超自然的な出来事に関して読者の判断を宙づりにするような要素が、鏡花の作品に備わっていたことが挙げられると思われる。もとより、鏡花にトドロフの研究が読めたわけではない。しかしながら、西洋から流入する超自然的な作品を、怪談作法の点から読み込んでいた鏡花の作品は、西洋の超自然的を扱った作品群を分類することによって括りだされたトドロフの定式、すなわち西洋的な超自然を扱った幻想文学の特性を備えていたのである。この研究成果は、口頭発表した後、英語と日本語双方の形で出版できるよう鋭意努力してゆく予定である。

以上